

TTCの誕生とその立ち上げを振り返って

標準化会議名誉議長 葉原 耕平



1. はじめに

TTCがめでたく創立30周年を迎える由、その節目に表題のテーマで寄稿のご依頼を受けたことは、TTCの立ち上げ、初期の運営にかかわった者のひとりとして大変光栄に感じている。

一方、本号には私が標準化会議議長の職を辞した時の講演録「TTC ―その誕生から今日まで―」のリメイク版も掲載して頂けるとのことで、主要点はそれに尽くされており、今回与えられたテーマについては「このリメイク版をご覧ください」といえばそれがすべて、といっても過言ではない。

しかし、それでは身も蓋もないので、本稿ではリメイク版では十分には触れてない裏話やエピソードのいくつかを紹介することで草創期の雰囲気的一端を感じて頂き、リメイク版を補完することとする。

2. 組織の理念

どんな組織でも、その扱う内容は時代に応じて、いや先取りして変えていくことが望ましいが、変えてはならないものもある。TTCにおいては、それは故秋山理事長が示された「透明性・公正性」「ルールとその尊重」に代表される。

3. ルールの尊重、原理原則に立ち戻る

この二つは私がTTCで常に念頭においたことである。具体例でいくつか紹介する。

3.1 IEEE Communications Societyのあるべきこと

TTC 発足よりかなり前のある日、IEEE Communications Societyから文書が届いた。インターネットも電子メールもなくすべて紙ベースの時代である。そこには「ソサイエティの運営に当たり、時

代に相応してBylawsを改変したいが、それには会員の30%以上の回答(返信)が必要である。しかし、これまで回答率が30%に届いたことがない。したがって改変が容易にできるようそれを20%に変えたいが、それには現行規定で30%以上の回答が必須である。よってぜひ回答を寄せられたい」という切々たる訴えであった。なるほど、当たり前といえば当たり前、しかし、こういうメンタリティの国が経済摩擦の相手なのだ。それ以来、私はルールを守ることの重要性をあらためて肝に銘じていた。

3.2 第1回ITSCで指摘したこと

1990年の第1回ITSC (Interregional Telecommunications Standards Conference) では、リメイク版に記載の通り、regionの定義のあいまいさを指摘し、また当時のTTCの機能がダウンストリームにとどまっていることを述べた。これらはITSCの枠組みつまり原理原則にかかわることであり、あとで無用の混乱を生じさせないために行ったことであった。合わせて今では広く使われているアップストリームという用語を標準化の世界に持ち込んだのはダウンストリームと合わせてわれわれが初めてであった。ITSCの場でいくつかの肝心のポイントを指摘したことはTTCの存在価値を十分に高めた、と思っている。

3.3 第2回ITSCでのワーキングディナーとメンバー区分

1991年、第2回ITSCがニースで開かれた。その会期中に議長のテンブル氏(英)がカナダとオーストラリアをメンバーに加えたいという意向であることを知った。われわれはいきなり本会議に入ると混乱を生じる危険があると思い、前日に関係者でのワーキング

ディナーを提案した。その席でテンブル氏の提案に対して私から「そもそもITSCはITUの作業の効率化のため、能力のある有志つまりITSCメンバーがボランティアで前作業を行うという主旨である。メンバーを無制限にすると希望メンバー数がITU構成国数と同じまで増える危険があり、当初の主旨から逸脱する」旨ITSCの基本を強調した。テンブル氏はそこまでの考えはなかったようで虚を突かれた様子であったが、元来頭の切れる人物でもあったので、全員で知恵を絞った結果、メンバークラスをFounders Partner : CCIs, T1, TTC, ETSI とOthersに分け、皿回しはFounders Partnerが行い、Othersの参加資格にはとくに制限を設けない、という腹積もりを固めてワーキングディナーを終えた。そのとき、日付が変わっていた。そして望んだ本会議では特段もめることもなく議事が進み、カナダ、オーストラリア両国からはメンバーに加えられたことに謝意が表明された。テンブル氏にしてみれば、議長そして出身の英国としての宗主国の面目を保ち、同時にITSCの主旨を守ることができ、ワーキングディナーを提案したことに感謝された。

4. エピソード

最期に草創期の数多くのエピソードのごく一部を順不同で記す。

4.1 サイクス FCC 委員長

発足直後の米国調査で FCC 訪問の機会を得、サイクス委員長にはTTC に対しては時間を割いてじっくり面会に応じて頂いた。椅子を逆向きにし背もたれに腕を載せてわれわれに対面するなど、実にザックパランであった。面会の中でインターネットという言葉が出て、アメリカですでに話題になっていることを知ることができた。別の機会では私のところに寄ってきて「日本のデジタル交換について聞かせてほしい」といわれたことがあった。勉強熱心の証左であろう。FCC といえば事務局に李さんという方がおられ、日本語がきわめて堪能。個人的には今もカードを交換している。

4.2 第1回ITSCでのできごと

3.2では少し硬い話を述べた。この第1回ITSCはT-1の方々のご家族を含めた献身的かつ暖かいご尽力もあって極めて友好裏に終わった。その会期中に、わ



れわれに大きなケーキが手渡された。何とTTCの5周年を祝うバースデーケーキ、われわれには思いもよらなかったサプライズ、ご厚意に心から感謝したことを鮮明に覚えている。

これがヒントになり、2005年11月、「TTC創立20周年記念シンポジウム」を開催した折、韓国のTTA17周年を祝ってTTCからケーキを贈呈し、大変喜ばれた。

4.3 豊田会長と秋山理事長

お二人のお人柄に関することである。お二人とも会議には必ず時間前にお見えになった。また、TTC主催の懇親会ではレシービングラインで招待者をお迎えになり、散会後も最後までドアのところでお見送りになっておられた。TTCに深い愛着を持っておられたのであろう。そして、このような誠実な姿勢が国際的にもTTCの評価を高めた、と私は信じている。

4.4 おわりに

以上、断片的に当時のことを書かせて頂いた。しかし、ゼロからのスタートでここまで来たのは、メンバーのボランティアな活躍もさることながら、飯田専務、舟木初代、神岡2代両局長はじめ事務局の皆さんの献身的なご尽力の賜物である。ここに当時を振り返って深甚な謝意を表してこの小欄を締めくくらせて頂く。

なお、草創期の雰囲気や如実に物語るものとしてTTC創立1周年記念特集の対談「TTC この1年」(TTC Report Vol.1, No.4)と3周年特別企画「TTC創設顛末記」(TTC Report Vol.3, No.4)を合わせて参照されることを強くお勧めする。